

豊かな人間性を培う家庭教育の推進

－発達段階に応じた子どもの特徴と子どもへの働きかけ－

家庭教育係長 乾 義 輝

Inui Yoshiteru

要 旨

発達段階の子どもの特徴やそれぞれの時期の子どもへの働きかけ等を探り、親としての役割を認識するとともに、健全な子どもの育成の在り方を学び、家庭教育の支援に役立てる。

キーワード： 発達段階、母性・父性、健全な子どもの育成

1 はじめに

家庭には、子どもの養護と教育の二つの役割がある。養護とは、子どもの心と体の健康を守り、子どもに安心感をはぐくむためのかかわりである。子どもをしっかりと抱きしめて、子どもの存在を受け止めて世話をすることである。つまり、母性的なかかわりであるといえる。また、教育とは、子どもが社会的な生活を営める自立した大人になるためにしつけをすることであり、子どもの能力を最大限活かして生きていけるように援助することである。他律から自律へとつなげ、社会での自立を確立することである。つまり、父性的なかかわりである。家庭の中で母性と父性が子どもに対して有効に働くことによって、子どもたちの心と体は健全な成長を遂げていくものである。子どもの発達段階に応じて、これら母性と父性がバランスよく働きかけることが必要である。発達段階に応じた子どもの特徴などを明らかにするとともに、その時期の子どもへの働きかけなども理解することにより、健全な子どもの育成に役立てる。

2 研究目的

発達段階の子どもの特徴やそれぞれの時期の子どもへの働きかけ等を探り、親としての役割を認識するとともに、健全な子どもの育成の在り方を学び、家庭教育の支援に役立てる。

3 研究方法

- (1) 母性・父性
- (2) 胎児期
 - ア 胎児期の特徴
 - イ 胎児期の子どもへの働きかけ
 - ウ 母親の健康と心の安定を図る
- (3) 乳児期（0歳～1歳ごろ）
 - ア 乳児期の特徴
 - イ 乳児期の子どもへの働きかけ
 - ウ 母乳育児について

- (4) 幼児期前期（1歳～3歳ごろ）
 - ア 乳児期前期の特徴
 - イ 生活リズムを身に付ける
- (5) 幼児期後期（3歳～6歳ごろ）
 - ア 幼児期後期の特徴
 - イ 幼児期後期の子どもへの働きかけ
 - ウ 社会性の獲得の手助けをする
- (6) 児童期（6歳～12歳ごろ）
 - ア 児童期の特徴
 - イ 児童期の子どもへの働きかけ
 - ウ 知・徳・体のバランスのとれたしつけ
- (7) 思春期（10歳～22歳ごろ）
 - ア 思春期の特徴
 - イ 思春期の子どもへの働きかけ

4 研究内容

(1) 母性・父性

子どもを育てていく上で、母性と父性という機能はとても大切である。ありのままのその子を受け入れ、認め、そして絶対的なやすらぎを与えるのが母性である。これに対して、これはダメ、こうしなさいというルールやマナーを教えるのが父性である。母性は何でも許してしまうが、父性は許されないことを示し、制限する。

母性が強すぎると、甘えん坊で自立できない人間が育ち、父性が強すぎると、わがままで攻撃的な人間が育つと言われている。子どもが健全に育つためには、まず、母性的なものが家庭に必要である。母性的なものが十分に与えられてからでないと、子どもは父性的なものを受け入れることができない。（「親学サポートブッカー 思春期の子どもをもつ保護者のために」より）

児童精神科医の佐々木正美は、「こどもへのまなざし」（福音館書店）の中で、「母性が与えられたあとにしか、父性的なものは働かない。また、この順番は決定的なものであり、母性的なくつろぎや、やすらぎ、そういうものが子どもたちのなかに十分伝わっていないのに、父性的なものを、いわゆる、しつけとか教育とか訓練によって育てようとしても、これはなかなか育たない。」と述べている。また、3歳ごろから、父性的なものを受け入れることができるようになるとも述べている。

心理学者のE. H. エリクソンは、「幼児期と社会」（みすず書房）の中で、乳児期には養育者との間に絶対的な信頼関係（Basic Trust）を感じられることが必要だと述べている。

(2) 胎児期

ア 胎児期の特徴

かつての児童心理学では、「子どもは誕生したときは白紙の状態である」ととらえられていた。誕生したときに、見ること・聞くことはできても、それがいったい何であるのかという認識はなく、生まれてからのちに、知覚的な働きと実際の体験を積み重ねて、少しずつ外界を理解していくものだと考えられていた。しかし、今日では、誕生直後の子どもは白紙の状態ではなく、すでにいくつかの認知の能力を備えていることが明らかになっている。イタリアと日本の児童心理学や脳科学の学者たちの共同研究によると、生後数日の子どもの脳に、MRI という画像診断装置

を用いて言葉がけを行ったところ、音に反応するだけでなく、言葉の意味を理解する働きのある脳の一部であるウェルニッケ野にも血流が流れ、生後直後にすでに人の話す言葉を意味ある言語として受け取っていることが分かった。この研究成果を踏まえると、胎児期の配慮点を根本的にとらえ直す必要があると考えられる。

イ 胎児期の子どもへの働きかけ

生後直後に、すでに言葉を理解しようとする脳の部分が機能しているのなら、この機能をはぐくむ時期は胎児期にあるということになり、胎児への言葉がけや音楽が胎教として有効であると言える。母親の胎内において、胎児の視覚は4か月、聴覚は6か月ごろには形成される。家族から呼びかけ、話しかけられるなどの人間的な働きが、胎教として有効である。胎児の様々な感覚器官は、言葉や人の感情に反応できるまで発達しているので、生まれる前から親子の関係を築くことが可能である。

ウ 母親の健康と心の安定を図る

母親の健康と心の安定には、特に配慮が必要である。適切な食事を摂ることはもちろん、規則正しい、ゆっくりとした生活を送るように心がける。胎児の脳には、必要なホルモンが正しく与えられることと、有害な化学物質を与えないようにすることが重要である。母親がストレスにさらされると、体内のホルモンバランスが崩れ、胎児の心と体に大きな影響を及ぼしてしまうことになる。また、胎児期から生後1年までの間は、有害な化学物質を遮断する関門ができていない。母胎に入り込んだ有害物質は、胎盤や母乳からそのまま胎児に入り込んでしまう。母親がストレスにさらされないよう、安定した情緒を保てるように配慮し、胎児を尊重することが大切である。職場での配慮が必要であり、父親や家族は積極的に家事に協力することが求められる。

(3) 乳児期（0歳～1歳ごろ）

ア 乳児期の特徴

生まれたばかりの赤ちゃんは、口を感覚器とし、何でも口に入れて確かめながら生活している。自分では移動できないので大人に頼らざるを得ず、手に届く範囲のものが世界のすべてである。朝起きて、昼間は体を動かし、夜寝るといった人間らしい生活を送るために中心的な役割を果たしている脳の部位に、大脳皮質と呼ばれるところがある。この大脳皮質の神経細胞であるニューロンの数は、生後数か月が最も多いといわれている。ニューロンは、外からの刺激を受けると、ほかのニューロンとつながってネットワーク化され、活発に機能するようになる。つまり、刺激を受けることによって脳が活性化するのである。乳児の場合は、自分から移動して新しいものに接することができないため、脳への刺激は、親や保護者が外部から積極的に与える必要がある。

イ 乳児期の子どもへの働きかけ

乳児期には、存在を肯定するかかわりが、非常に大切である。発達心理学者のE. H. エリクソンは、この時期の子どもが獲得しなければならない課題として「基本的信頼」をあげている。これは、絶対的に信頼できる養育者と心理的につながることによって、子どもの精神が安定し、対人関係を広げていけるようになる、というものである。どんなに日常生活上の世話がなされたとしても、心と心を通わせる人間的なかわりがなければ、子どもの心は育たないといえる。

この時期は、母親ばかりに負担がかかってしまいがちである。母親だけが子育ての中心であればよいというものではない。父親は、母親の育児負担を少なくし、子育てを喜びと感ぜられる環境をつくることが求められる。母乳を与えることは、抱きながら語りかけながらのかかわりであるために、母親の時間のすべてを赤ちゃんに奪われてしまう。また、どこかへ出かけることもできず、育児のストレスを発散する手段もない。肉体的にも精神的にも疲れがちな母親を支えることが父親に求められる。父親は、できるだけ母親との時間をたくさんもつようにし、家事をサポ

ートすることも必要である。

ウ 母乳育児について

母乳は、赤ちゃんが必要としている栄養素をまんべんなく含んでいるだけでなく、病気への免疫力を高める。母乳で育った赤ちゃんは、下痢や消化器感染症、呼吸器感染症などにかかりにくく、アレルギーにもなりにくいといわれている。母乳には、母親がかかった病気の抗体が含まれていて、突然死、小児糖尿病、小児がん等の発生率も低くなる。また、母乳育児の効果は、身体的な健康だけにとどまらない。子どもの精神や感情、社会性等の発達にもよい影響を与える。さらに、母乳育児は、母親の健康にも深くかかわっている。授乳中にはオキシトシンというホルモンが分泌されるが、このホルモンが分泌されることによって子宮が収縮し、分娩後の出血がより早く止まる。この他にも出産後の身体回復の促進や、うつ病にかかりにくくなる等の効果もある。しかし、最も重要なことは、母乳育児によって、母親と赤ちゃんの情緒的な絆が深まること、つまり母親の母性が高まることである。もちろん、母乳というかわりがない場合には、赤ちゃんの発達に適したバランスのとれたミルクでもよい。

(4) 幼児期前期（1歳～3歳ごろ）

ア 幼児期前期の特徴

1歳から3歳くらいまでの時期を「幼児期前期」という。2～3歳には、脳の容量は出産時の2倍に増加し、食事や排泄など、日常生活の基本的パターンを身に付けさせることができる。話すことの学習が始まるのも、この時期である。幼児期前期の子どもの脳にとって必要なのは、情緒の安定、養育者との間に信頼感をもちながら自己イメージを形成すること、生活リズムを整えることである。この時期はセロトニン神経が育っていく時期である。セロトニン神経は、平常心を保ち、幸せを感じながら生活するために不可欠なものである。

イ 生活リズムを身に付ける

幼児期前期の子どもにとって大きな課題は、食生活の自立とトイレ・トレーニングである。これらは、失敗の連続から身に付いていくものである。失敗の連続に対して、親がどのように対応するかが、この時期の子育ての基本になる。子どもが自分でやりたがる気持ちを尊重してやり、失敗は当たり前のことと心得て、強く叱ったりすることは避ける。この時期の子どもは、失敗を失敗と認識できない発達段階にいる。「失敗してもいい、いつかは成功するのだから」とおおらかな気持ちでゆっくり教えていくことが大切である。

幼児期前期になると、おぼつかないながらも歩くことができるようになる。まだ運動能力が十分でないため、転んだりして危ないことばかりであるが今まで手が届かなかったものに触れることができ、興味と関心が広がる時期である。子どもの安全を守りながら、のびのびと、特に屋外で全身を使って遊ぶことが望ましい時期である。

生活のリズムを整えることも、この時期に身に付けるべき課題である。早寝早起きを習慣付け、食生活の基本を守ることが大切である。

(5) 幼児期後期（3歳～6歳ごろ）

ア 幼児期後期の特徴

3歳から6歳にいたる幼児期後期には、脳の容量は1,000g（大人の3分の2）に達する。この時期は、子どもの自我が急激に芽生えてくる。家族だけではなく、保育所・幼稚園で集団生活を体験し、友達との交流の中から対人関係の基礎を培い、善悪の基準を学び、道徳心を培っていく。幼児期後期の子どもが獲得しなければならない課題は、良好な原初的価値観の形成（原初的価値観とは、例えば、「話を聴くときに相手を見る」「あいさつをしない人に不快感を覚える」といった無意識の反応のことで、人間関係のもち方等の社会的行動の基礎となるもの）、集団性の認

識、性差を踏まえた社会的存在認識である。親に守られながらも、自己中心であった社会認識が少しずつ変わり、集団感覚が芽生え、集団の中での自己認識ができ、秩序感覚をもち始めるのがこの時期である。つまり、しつけが重要な時期ということになる。(ただし、母性が与えられたあとにしか、父性的なものは働かない。また、この順番は決定的なものである。)

イ 幼児期後期の子どもへの働きかけ

この時期に、親がどんな生活を送っているかということが、子どもの「原初的価値観」の形成にかかわってくる。幼児期後期の子どもは、なんでも大人の真似をする。大人の真似をすることを通して、自分の存在を確かめ、原初的価値観を形づくっているのである。子どもをしつけ、子どもによき原初的価値観をもたせようとするならば、大人が行動によって示すことがなによりも大切なのである。親として、子どもの身に付けさせたい行動を、子どもの前で日常的に進めることがしつけにつながる。毎日のあいさつ、お礼を言うこと、食事のマナー、人間関係の持ち方等すべてにわたって、親がしていることはみなよいことであり、親がしていないことはよくないことかもしれないと子どもは思っている。親は、常に子どもの社会的活動のモデルとなっていることを意識していなければならない。

ウ 社会性の獲得の手助けをする

3歳になると自己意識がはっきりしてくる。親の指示に逆らって「私はこうする」と自己主張し始める。自己意識を強くもちはじめた子どもは、親に認めてもらいたいと感じたときに自己主張する。どんなに感情を出しても、自分の欲求が通じないことが分かると、子どもは、他人のことや社会(家庭)のルールを意識するようになる。これが「集団性」の獲得であり、秩序感覚の獲得なのである。

(6) 児童期(6歳～12歳ごろ)

ア 児童期の特徴

児童期の脳の容量は、幼児期の3倍に達する。学校で過ごす時間が長くなり、一人前の人格をもった人間となるための基礎を学ぶ大切な時期である。知能の面だけでなく、情操、つまり感性の豊かな人間となるような指導が望まれる。体育では、競技だけでなく、忍耐力を培うことも重要である。

イ 児童期の子どもへの働きかけ

児童期に与えられた大きな課題は積極的に集団活動に参加し、将来の社会生活に必要な知識・技能を身に付けること、より大きな集団の中での自分を意識し、集団を愛する気持ちへと高めること、そして、知・徳・体のバランスのよい発達を目指すことである。小学校に入り、集団の規模が大きくなって、同年齢の仲間との経験が増えるにしたがい、価値判断の基準を、大人から仲間集団の中に見出す方向へと変えていく。「大人が決めたことを守らないのは悪い」という発想から「集団の構成員で決めたことを守らないのは悪い」という考え方へ変わってくるのである。児童期の子どもは、集団の中で周りと同じ行動をとり、同じ経験をすることで自己イメージの安定を図っていくのである。

この時期、親がしてやれることは、家族の中で子どもが自己を感じることができ、更に、家族の中で自分の役割が認められている、という環境をつくることである。家族の中で役割を与えて、自分の存在が他者の役に立っているという実感を積極的に与えることが大切である。心は、叱るだけでは成長しない。子どもの行動をほめたり、子どもが手伝いなどをしたことに対して感謝することによって成長するものである。自己が認められ、役割を与えられた中で、集団を意識できるようになれば、自然に自己とその所属する集団を愛することができるようになる。

ウ 知・徳・体のバランスのとれたしつけ

児童期の子どもの発達課題の一つは、社会的存在になるために必要な基礎的能力、つまり、他者とともに生きる力を身に付けることである。E. H. エリクソンはこの時期の発達課題を「勤勉」と表現している。認知的な能力の急速な発達に合わせて、学校での学びや様々な経験を通し、他者とともに生きる力を培うのである。現代は、とかく知育に偏りがちであるが、いくらIQが高くても社会的な能力が欠けていては「ともに生きる力」とはならない。また、知力と同時に、整った体力・運動能力がなければ、生きる上での役には立たないのである。知育、徳育、体育を、ともにバランスよく身に付けることによって、他者とともに生きる力が育っていく。子どもの知力・体力をはぐくむとともに、子どもが積極的に集団活動に参加し、集団の秩序を身に付けるよう導いていかねばならない。

(7) 思春期（10歳～22歳ごろ）

ア 思春期の特徴

体が急激に成長し、自意識過剰で感受性が強くなることから、ちょっとしたことで気分が変わりやすく、情緒不安定になる時期である。たとえば、登校する時は機嫌が悪かったのに、何もなかったように上機嫌で帰宅することがよくある。友達から「きしょい」と言われると、ひどく落ち込み、「すごい」と言われると、有頂天になる。心身ともに安定した児童期から、身体的・性的に成熟した「男」、「女」へと急激に変化し、男女の体型の違いが出てくるのが思春期である。男子の身長は19歳ころまで、女子の身長は17歳ころまで伸び、親に追いつき、あるいは追い越していく。一般に女子の方が早く成長し、10歳から12歳ころにかけて、身長、体重ともに、女子が男子よりもまさる時期がある。性ホルモンの作用により第2次性徴が現れる。男子では、12歳ころからわき毛、ひげ、陰毛が生え、声が変わり、陰茎が大きくなり、初めての射精（精通）が見られる。女子では、10歳ころから乳房がふくらみ、わき毛や陰毛が生え、乳頭が突出し、16歳ころまでには初めての月経（初潮）が見られる。思春期に見られる反抗は、これまでの自分を変えて、自立した新しい自分をつくりたいという気持ちの現れである。小学校中学年ごろまでの子どもは、親の言うことを素直に聞いて、親に従ってきたが、体がしだいに大きくなるにつれ、このままでいいのかという疑問をもつようになる。今までの自分を変えて、新しい自分になりたいと思うようになる。その思いが親や大人への反抗として現れる。

思春期の子どもの心理状態には、多くの点で身体的・性的成熟が関係している。まず、友達と比べて優越感や劣等感、時には孤独感や不安感をもつかもしれない。身体的には自分はもう大人になったと思っているのに、親から「まだ子どもなのだから、親の言うことを聞きなさい」と言われ、時には「中学生にもなって、もう子どもではないのだから、しっかりしなさい」といわれる。もともと身体的・性的成熟と精神的発達がアンバランスな時期であるので、子どもは自分は何であるのか、どうしたらよいかが分からなくなり、ますます不安定になる。

思春期の子どもが悩みを相談する相手は友達が最も多く、次が母親で、父親にはほとんど相談しない。高校生以上になれば、もっぱら友達に相談し、親は相手にされなくなる。親よりも友達の方が大切になってきて、友達の意見を取り入れるようになる。このような変化は、単に親の言うことを聞かないとか、親の意見を無視しているというのではなく、子どもが親から心理的に離乳し、独立しようとする自立心の現れである。この時期では、これまでのような単なる「遊び友達」ではなく、相互に信頼して悩みを打ち明け、相談することができるような「心の友達」が必要になる。中学生が好きな友達を選ぶ主な理由として、朗らか、面白い、親切、やさしい、真面

目、熱心など相手の人柄、趣味や考え方の一致、気が合う、相談に乗ってくれる、一緒に遊ぶなどが挙げられている。男子の交遊は、友達と一緒にいろいろなところを探索したり、ゲームをして遊ぶようなことが多いようである。女子の交遊は、自分の気持ちや個人的な事柄を話したり、他のグループの人の噂話をするなど、おしゃべりやメールの交換が多いようである。友達との交遊が進むと、僕たちのグループ、私たちのグループといった仲間意識が強くなる。仲間同士で秘密を共有し、結束が強くなる。友達との交遊が心の支えとなり、よりどころになる。そのために、善きにつけ悪きにつけ、友達の影響を強く受ける。いったん友達としてのグループができると、比較的長く続く。この時期に、生涯の友となるような親友ができることが多いようである。また、思春期には、友達からどのように思われているかが気になり、友達から認められたい、友達と一緒にいたい、仲間外れになりたくないというような対人的欲求が強くなる。友達ができると、そのような欲求が満たされて孤独感や不安感が軽減する。友達との交遊によって親離れが進み、責任感や協調性などの社会性が培われる。

イ 思春期の子どもへの働きかけ

子どもに反抗されると、親の言うことを聞かなくなった、素直でなくなった、更には悪くなったなどと思いがちである。これからどうなるだろうかと不安になる。しかし見方を変えて、親に反抗するのは新しい自分をつくろうとしているサイン、成長しているサインであるにとらえることが大切である。子どものちょっとした言動に一喜一憂せず、あまり感情的にならずに、子どもの成長を見守ることである。見守るといっても子どもに遠慮するのではなく、親の思いや意見はしっかりと伝えなくてはならない。思春期の子どもは、自分が最高であるか最低であるかという両極端で考えがちである。自分は人より優れていて何でもできるという万能感をもったり、自分は人より劣っているという劣等感をもったりする。また、自分を過大に評価したり、過小に評価したりする。このように揺れ動くことが、気分の不安定さに関係しているようである。そこで、自分を過大評価して過信したり、過小評価して落ち込んだりしないように導くことが大切である。

また、体の変化は、子どもの意志とは無関係に生じるものであり、自分ではコントロールできないものである。第2次性徴については適当な時期に予備知識を与えておくことが求められる。特に、その年齢には大きな個人差があること、第2次性徴の出現が早い遅いかに過敏に反応してはいけないことを教える。早いからあるいは遅いからといって、良いとか悪いとかいうことはまったくない。

成長に伴って、自分の容姿への関心が高まる。人の目に自分がどのように映っているか、人からどのように思われているかを気にするようになる。これは自意識の現れである。容姿に限らず、自分の言動などについて周囲の人がどのように思うかを気にすることは、社会生活では必要なことである。しかし、自意識過剰になりすぎると、容姿だけでなく自分のすべてを悪くみるようになる。その結果、強い劣等感や不安感に悩まされることがあるので、子どもの様子に気を配ることが重要である。

5 研究結果と考察

発達段階に応じた子どもの特徴や子どもに対する働きかけ等を知ることにより、子どもとのかかわり方や、どのようにアドバイスや指導をすればよいかを理解するための一助とする。また、健全な子どもの育成にかかわっている教職員が、これらの事柄を主体的に学習するとともに、子どもに対する指導等に役立てていただく。また、このことを通して、家庭教育支援の推進に向けた取組の一つとして役立てる。

6 おわりに

今回の研究では、発達段階に応じた子どもの特徴や働きかけ等を探るために様々な文献を通して考察を行ってきた。今後は、全国の先進的な行政支援に学びながら、行政として成し得ることを実行していきたい。

参考・引用文献

- | | | | |
|---------------------------|-------------|---------|------|
| (1) 心の子育てー誕生から思春期までの48章ー | 河合隼雄 | 朝日文庫 | 2001 |
| (2) 思春期のころ | 清水将之 | NHKブックス | 1996 |
| (3) 思春期を生きる力 | 石田一宏 | 大月書店 | 1999 |
| (4) 日本の高校生（国際比較でみる） | 千石 保 | NHKブックス | 1998 |
| (5) 親たちの「思春期」攻防戦 | 中孝彦 高垣忠一郎 | 大月書店 | 1999 |
| (6) 中学生をわかりたい | 田中孝彦 高垣忠一郎 | 大月書店 | 1999 |
| (7) NHK中学生・高校生の生活と意識調査 | NHK放送文化研究所編 | NHK出版 | 2003 |
| (8) こんな中学校に変えよう | 田中孝彦 高垣忠一郎 | 大月書店 | 1999 |
| (9) こどもへのまなざし | 佐々木正美 | 福音館書店 | 2006 |
| (10) 「カプセル家族」の危機 | 尾木直樹 | 学研新書 | 2007 |
| (11) 「幼児期と社会」(1) | E. H. エリクソン | みすず書房 | 1977 |
| (12) 「幼児期と社会」(2) | E. H. エリクソン | みすず書房 | 1980 |
| (13) 「親学」の教科書ー親が育つ子どもが育つー | PHP親学研究会 | PHP | 2007 |